

令和 3 年 5 月 19 日現在

機関番号：55201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00902

研究課題名(和文)多読指導へのMoodle活用とAutonomy

研究課題名(英文)Extensive Readers and Teachers Autonomy with Moodle

研究代表者

服部 真弓 (HATTORI, Mayumi)

松江工業高等専門学校・人文科学科・教授

研究者番号：00300608

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：記録媒体「多読Moodle」を活用した多読学習と学習者オートノミーの実態、及び「多読Moodle」の導入を通して生じる英語多読指導に対する指導者意識と指導の変容を質的分析により検証し、新しく可能となる指導事例を提案することを試みた。開発した「多読Moodle」に端末から読書記録を入力すると、読了語数が即時にグラフ化され、学びのプロセスが可視化されるので、学習者は自身の多読記録をいつでも省察することが可能になり、多読がより能動的な自律的学習につながりつつあることがうかがえる。指導者意識の変容は見られないが、その役割は直接的から間接的へと変容し多読学習の「支援者」となりつつあることがうかがえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、日本の教育全体において主体的・自律的な学習者の育成が求められている。本研究の「多読Moodle」が実現する「学習過程の可視化」および「他者の学習状況との比較」は心理学における自己確認、自己拡大につながり自己満足へと昇華するため継続的な学習が期待できるものであり、自律的多読学習を促進しつつある。指導者は、ただ本を読むように指示するだけではなく、学習者自身が読書活動を効果的に進める支援をすることも求められる。本研究は、指導者側に求められるこの課題についての解決策を模索し、「多読Moodle」を開発・導入することを通して生じる英語多読指導に対する指導者意識と指導の変容についても検証する。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to examine 1) extensive readers' autonomy through our extensive reading program using "Tadoku (Extensive Reading) Moodle," an online recorded reading system, and 2) the changes in teachers' belief and actions in extensive reading classes brought about by the introduction of "Tadoku Moodle."

With the developed "Tadoku Moodle," when reading records are input from a terminal, the number of read words is immediately graphed and the learning process is visualized. Learners can always reflect on their own extensive reading records, and extensive reading has led to more active and autonomous learning. Teachers' belief towards the instruction has not been changed by the introduction of the system, but some of the instructors' roles have changed from "direct" to "indirect."

研究分野：英語教育学，多読学習を通じた自律的学習

キーワード：多読学習 Moodle 学習者オートノミー 省察 指導の変容

図3 調査協力者の分類

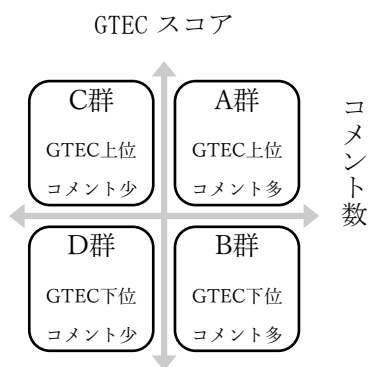
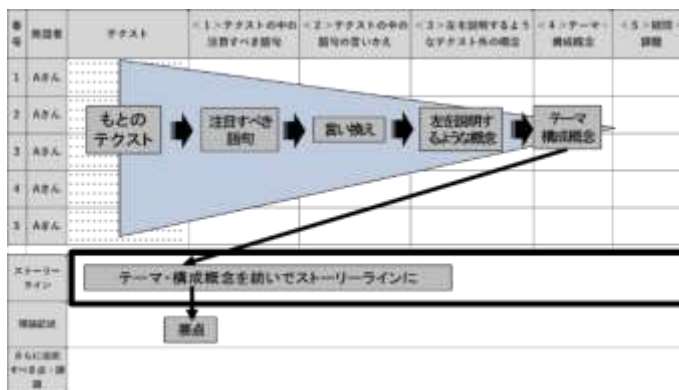


図4: SCAT の手順



【インタビュー調査項目】:

- ①意識調査項目 1) ~5) と 9) を見て、多読 Moodle の「何を」「どんな時に」確認したか、それを確認して「何を思った」か。
- ②意識調査項目 10) について、その回答を選んだ理由は何か。
- ③意識調査項目 11) について、その回答を選んだ理由は何か。
- ④多読に乗り気でない学生は、どうすれば多読をしようと思ってくれると思うか。

表1 調査協力者の質問紙への回答

	A-1	A-2	B-1	B-2	C-1	C-2	D-1	D-2
1. 「ランキング」表示は多読のモチベーションを上げると思う	3	3	4	5	4	5	3	3
2. 「この本を読んでいる人は他にこんな本を読んでいます」は、選書のヒントになると思う	3	4	4	4	3	4	4	4
3. 他の人のコメントを読んだことがある	4	1	4	2	1	4	1	1
4. 他の人のコメントは選書の参考になると思う	4	3	4	3	4	4	1	4
5. 「いいね」ボタンを押したことがある	1	1	1	1	1	1	1	1
6. 保管・管理がし易い	4	4	4	2	5	5	5	5
7. 書名・語数を正確に記録し易い	5	5	4	5	5	5	5	5
8. 先生からのフィードバックコメントは、多読に対する意欲の向上につながると思う	4	4	4	5	4	4	3	5
9. 多読進行状況を確認し易い	5	5	4	3	5	5	5	5
10. 授業以外でも英語の本に触れるようになった	3	3	1	1	1	2	1	5
11. 記録を効果的な多読学習に結び付け易い	4	5	3	2	4	5	3	5
12. 記録媒体としての総合評価	4	5	5	4	4	5	5	5

(1: 全くあてはまらない 2: あてはまらない 3: どちらともいえない 4: あてはまる 5: とてもあてはまる)

(12) は、悪い ← 1 2 3 4 5 → 良い

3. 2 指導者に関する調査

多読 Moodle を用いて1年間の多読授業に関わった教員のうち3名(表2)に、従来の紙ファイルと多読 Moodle との比較を行うための質問紙(表3; 回答方法は5件法)に事前(2020年1月)に回答してもらい、それに基づいた振り返りのための討議を行い(2020年3月)、その発話データを書き起こしたものを質的に分析した。

表2 調査協力者の多読指導歴

	教員 A	教員 B	教員 C
多読指導歴 (調査時)	3年 (教職 11年目)	5年 (教職 7年目)	9年 (教職 29年目)

表3 調査協力者の質問紙への回答

	紙ファイル			多読 Moodle		
	教員 A	教員 B	教員 C	教員 A	教員 B	教員 C
1. 保管・管理がし易い	4	2	2	4	5	5
2. 学習者に語数を正確に記録させ易い	4	3	2	5	5	5
3. 学習者に書名を正確に記録させ易い	4	3	2	5	5	4
4. 学習者に対してフィードバックし易い	5	4	3	4	2	4
5. 学習者の進行状況を確認し易い	5	3	3	2	4	4
6. 学習者に対して多読図書の紹介をし易い	5	1	3	3	4	5
7. 学習者同士の感想交流の場を確保し易い	4	1	2	5	4	5
8. 学習者に対して授業外多読を促進し易い	1	3	2	5	4	5
9. 記録を効果的な指導に結び付け易い	5	2	3	4	3	4
10. 記録媒体としての総合評価	5	3	3	5	4	4

(1: 全くあてはまらない 2: あてはまらない 3: どちらともいえない 4: あてはまる 5: とてもあてはまる)

4. 研究成果【紙面の都合上、研究協力者の発話データを割愛してまとめるものである】

4. 1 学習者に関する調査の結果

省察を次の計画的な多読学習に繋がられているかどうかという点について、研究協力者の発話データに基づいて学習習熟度別に考察をまとめていく（学習習熟度別比較は本研究の主旨ではない）。本研究における「学習者オートノミー」の定義は、青木（2006）「学習者が自分の希望やニーズに従って自分で自分の学習についての選択をし、学習の計画を立てて、それを実行し、その結果を評価する自由であり、責任であり、能力である」にしたがうものとする。

まず学習習熟度の高いA群とC群の多読学習の実態と学習者オートノミーの実態をまとめる。A群、C群ともに計画的に多読を進め、多読 Moodle を活用して自分の多読学習を評価し、次の計画的な多読学習に繋がっている点で学習者オートノミーが育まれているが、特にC群については、多読学習及び多読 Moodle の効果を洞察し、自己学習に採り入れる部分を吟味する様子もうかがえることから、青木（2006）の定義にもあるように、「学習者が自分の希望やニーズに従って自分で自分の学習についての選択」をしている点においても、学習者オートノミーが育まれていると言える。

次に学習習熟度の低いB群とD群の多読学習の実態と学習者オートノミーの実態をまとめる。D群は、英語苦手意識が強く、多読図書の内容を理解できず、記録と効果的な多読学習との繋がりを実感できていないこともあってか、多読学習への取り組み及び多読 Moodle の活用について消極的である。またB群は、多読 Moodle で他学習者のコメントに基づいて、また、自分の語学レベルに合わせて選書したり、「相手意識」を持ってコメント記入したりすることで、多読学習が奏功し、計画的な多読学習に繋がる可能性がうかがえた一方で、多読 Moodle の活用と効果的な多読学習の関係が実感できていないということも明らかとなり、ランキングや目標語数達成率に応じた成績評価などの外発的なインセンティブを活用しながら教師が適切に介入していく必要があるということも考えられる。

本研究は少人数を対象とした事例研究のため一般化することが目的ではないが、本研究で対象とした各群の学生の多読学習の実態と学習者オートノミーの実態には以上のような特徴があることが明らかとなった。

4. 2 指導者に関する調査の結果

指導者意識と指導の変容の特徴については、研究協力者の発話データに基づいてまとめていく。小嶋（2011）は学習者の自律性を育む教師に求められる指導者の役割を以下の7点にまとめており、これらを本研究の多読指導の具体に当てはめると表4のようになる。本研究で指導者オートノミーに触れる際には、下記具体に沿うものとする。

表4 学習者オートノミーを育む教師に求められる指導者の役割（小嶋，2011）と多読指導における具体

指導者の役割（小嶋，2011）	本研究の多読指導での具体
① 情報収集者	学習者の多読や英語学習に対する前提（学習動機などの学習者要因等）や学習者の現時点の取組み状況を把握する。
② 意思決定	収集した情報に基づいてどのような多読学習支援が必要かを決定する。
③ 動機づけ促進者	学習者の多読学習を促進するため、読み方指導や図書の紹介などを行ったりインセンティブを設定したりして動機づけを行う。

④ グループ・ダイナミクス推進者	例えば、感想の交流や学習者同士の多読学習の取組み状況の交流など、多読学習の状況に基づき学習集団で協働で学ぶ場を設ける。
⑤ カウンセラー	多読が進まない学生へ学習方略についての支援や、英語学習不安などについて情意的な支援を行う。
⑥ フィードバック供給者	多読の学習状況を踏まえてフィードバックを行う。
⑦ 省察的实践者・研究者	多読 Moodle を活用した多読学習の指導や成果を検証する。

まず 1 点目として、指導者がもつ自身の多読指導に対する理念については記録媒体の影響によって変容しなかったといえる点である。これは教師信条 (teacher belief) の研究領域において Rokeach (1968) が、中核的なビリーフ (central belief) はそうではないものに比べて変容しにくいと述べているように、教員 A については多読指導において読書履歴を非常に重視する点、教員 B では多読コメントへのフィードバックより教科書の内容指導を重視する点など、多読指導や英語授業での指導において教員が重要視する点が記録媒体の違いの影響を受けなかったということである。

2 点目は、多読 Moodle が有する機能を活用することで、できるようになったり効率化されたりした指導があるとともに、できなくなったり負担感が増した指導もあるということである。この点については、新しい記録媒体の導入に当たって指導者が柔軟に指導方法を変えることが求められると考えられる一方で、システム自体の修正・改善を図っていくことで「できなくなったり負担感が増した指導」を「できるようになったり効率化されたりした指導」に変えていく必要性もあるといえる。

3 点目は、多読 Moodle の機能を活用することによって、指導者の役割が「直接的」から「間接的」になった点があるということである。この点については、中田 (2008) が指摘するように、指導者が知識伝達者のような直接的な指導を行う立場から多読 Moodle を活用することで学習の支援者へとその役割を変えることには、自律的な学習者の育成という点においても非常に意味があると考えられる。これについては、指導者自身の多読指導が多読 Moodle の導入により大きく変容したという訳ではないものの、指導者の役割の一部が多読 Moodle によって補完されることで「直接的指導」から「間接的指導」に変わり、自身の英語運用能力や読書履歴等に基づいて本を選択するなどの自律的な判断を学習者に委ねることができるようになるなど、より良い多読学習の支援ができるようになったと考えることができる。

5. おわりに

多読指導に Moodle という ICT ツールを活用することは、学習者にとっても指導者にとっても一定の良い効果があると考えられる。本研究で導入した多読 Moodle は、開発段階であり、今後も定期的に振り返りながら、より良い多読指導のために改良を続ける必要性があるといえる。

<注>

注1) 小泉 (2009) は Nation (2009) に言及して効果的な多読指導のポイントを 6 点にまとめている。

注2) WPM (Words Per Minute) 1 分間に処理できる平均単語数を指す。読解の速度や発話の流暢さ (fluency) を測る尺度として用いられる。

<引用文献>

Rokeach, M. (1968). *Beliefs, attitudes, and values: a theory of organization and change*. San Francisco: Jossey-Bass.

青木直子 (2006). 「教師オートノミー」春原憲一郎・横溝紳一郎 (編) 『日本語教師の成長と自己研修 - 新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして』 (pp. 138-157). 東京: 凡人社.

大谷 尚 (2008). 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き - 」 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』教育科学 54(2), 27-44.

小泉利恵 (2009). 「第 1 章 英文読解と語彙知識」卯城祐司 (編著) 『英語リーディングの科学 - 読めたつむりの謎を解く』 (pp. 1-16). 東京: 研究社.

小嶋英夫 (2011). 「第 6 章 学習者と指導者の自律的成長」小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (編) 『成長する英語学習者 - 学習者要因と自律学習』 (pp. 133-161). 東京: 大修館書店.

中田賀之 (2008). 「今、なぜ英語教師にオートノミーが必要か」 『英語教育』 第 56 巻, 第 12 号, 25-27.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 服部真弓, 篠村恭子, 廣瀬 誠, 松田節郎, 早水英美, ハーヴィー佳奈	4. 巻 40号
2. 論文標題 多読学習へのMoodle導入と学習者オートノミーに関する質的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国高等専門学校英語教育学会研究論集	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 篠村恭子, 服部真弓	4. 巻 51号
2. 論文標題 高専での英語多読指導におけるオンライン記録媒体多読Moodle導入による指導者意識と指導の変容に関する質的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国地区英語教育学会誌	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 服部真弓, 篠村恭子, 廣瀬誠, 宮下真也, 松田節郎	4. 巻 39号
2. 論文標題 多読指導へのMoodle活用 -学びの省察を実現させる-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 全国高等専門学校英語教育学会研究論集	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 服部真弓, 篠村恭子, 宮下真也
2. 発表標題 多読指導へのMoodle活用
3. 学会等名 全国高等専門学校英語教育学会 (COCET) 第43回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬 誠, 岡田 康, 池田総一郎, 川見昌春, 稲葉 洋, 服部真弓, 原 元司, 金山典世
2. 発表標題 松江高专におけるLMS利用普及について
3. 学会等名 令和元年度高专フォーラム, 次世代情報ネットワークおよびウェブによる情報教育基盤(OS24)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部真弓
2. 発表標題 フォーラム「高专と技科大における英語教育の連携：相互理解と方向性」
3. 学会等名 全国高等専門学校英語教育学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	篠村 恭子 (SHINOMURA Kyoko) (90806077)	松江工業高等専門学校・人文科学科・講師 (55201)	
研究分担者	廣瀬 誠 (HIROSE Makoto) (40367660)	松江工業高等専門学校・情報工学科・准教授 (55201)	
研究分担者	H I G A M A R S H A L L (HIGA Marshall) (50736923)	松江工業高等専門学校・人文科学科・准教授 (55201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	早水 英美 (岸野英美) (HAYAMIZU Hidemi) (90512252)	松江工業高等専門学校・人文科学科・准教授 (55201)	
研究分担者	宮下 眞也 (MIYASHITA Shinya) (50259917)	松江工業高等専門学校・人文科学科・教授 (55201)	
研究分担者	松田 節郎 (MATSUDA Setsuro) (20378871)	松江工業高等専門学校・人文科学科・准教授 (55201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関